

発行/平成2年8月15日 No.18
えひめ地域づくり研究会議
(財)愛媛県まちづくり総合センター

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 18

● 特 五感とやすらぎ ● 集

- 触：やすらぎの空間で
川内町 田中 篤…………… 2
- 嗅：季節に香りを感じて
松前町 三好道子…………… 4
- 味：わがふる里を
料理する五葉の里
朝倉村 白石知宏…………… 6
- 聴：音楽と自然への讃歌
松山市 上田真二…………… 8
- 視：ふる里づくりを見てござる
松野町 柳野治示…………… 10

研修レポ

- ・第8回逆手塾から…………… 12

☆おたよりコーナー

元気印レポート

- ・南 風／一本松町…………… 16
- ・ピエロン／川之江市…………… 18

☆地域づくり学んで三年

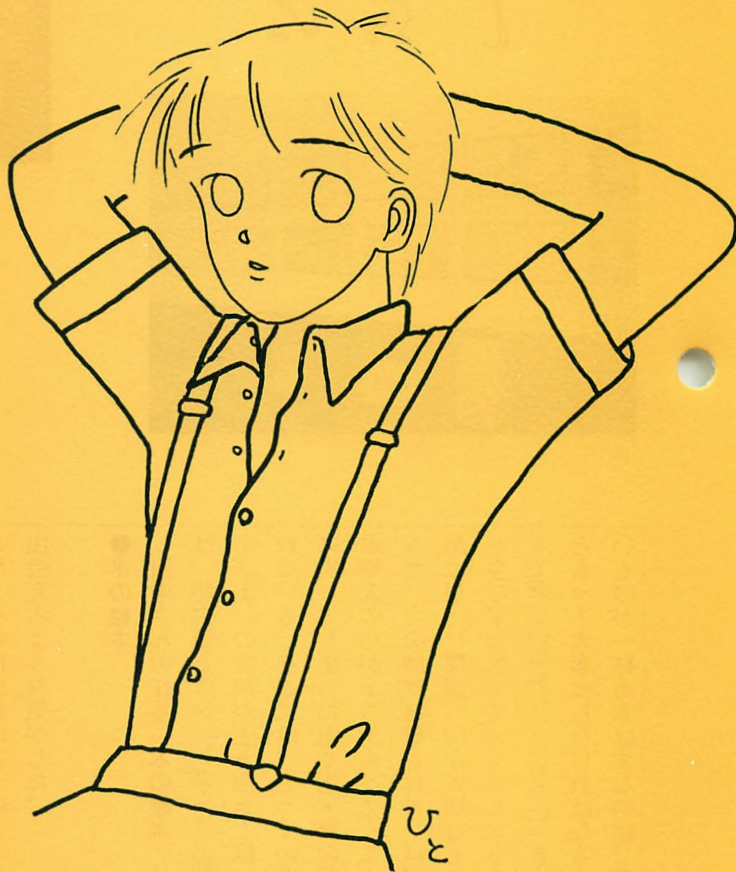
- よもやま話ノート…………… 20

研究会議 News Letter

- ・守谷和久／川之江市…………… 22
- ・浪口靖宏／内海村…………… 24

MESSAGE

- ・TOWNタウンパソコン通信…………… 25
- ・あなたのコーナー…………… 26
- ・まちセン ちょっとーク…………… 28
- ・編集後記



やすらぎの 空間で

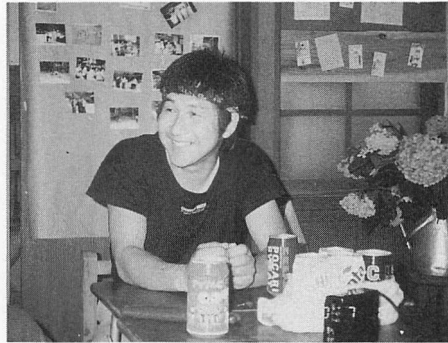
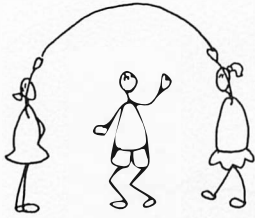
川内町

田中 篤

●わらんべ工房

国道一―号線から、横道に入り、しばらく走ると目の前に旧滑川小学校の校舎が見えてくる。橋を渡って一気にグラウンドまで入ると、そこにはナイター照明が取り付けられており、バレーボールの練習をしているのかネットが張ったままである。そして、その向こうには木造校舎が「やあ、いらっしやい」とでも言うかのように、どっしりと構えている。

「わらんべ工房」を開いている田中篤さんは、この中で快く迎えてくれた。ここに移り住んで二回目の夏に出会う。「最初、ひと目見た時に、住むのはこしかないと思った」という。回りには美し



●木の絵本

田中さんの作る「木の絵本」には、坊主頭とランニングシャツ姿、半ズボンの少年が生き生きと描かれている。そこには、とつくの昔に失ってしまった山や川・海の風景や人の心がよみがえってくるようだ。今の時代は確かにモノは豊かになった反面、何か大切なものを少しずつ捨てていってしまうようで淋しい気がしてならない。もっともっと大事にしなければならぬものが一杯あるはずなのに。そ

い緑やきれいな川の自然がいっぱいある。そして、多くの作品はそういう、やすらぎの空間の中で生まれた。

「わらんべ工房」と書かれた表札を目にしながら中に入ると、そこには懐かしい光景が広がった。

幼いころによく走ったり立たされたりした廊下、すりガラスや透明ガラスなどを見ていると、そのころの自分に還ったような錯覚を覚えた。そこにいれば多くの人々に出会えるような気がした。

れが、「木の絵本」のような形でしか表現できないというのは残念だ。

「島を離れて住んでみて、改めて島の良さがわかったようです。作品によって、その良さを解る人が増えてくれるといいのですが」と、ふるさとに対する思いはことのほか強い。

作品は、木に下絵を描いた後、糸のこで切り取り、彩色し、再びはめ込んで完成する。今では数枚にもおよび、ストーリー性をもたせている。当初は一枚ものが多く、クマ・ウサギなどの動物が主体だった。最近では、生まれ育った瀬戸内の風景を扱ったものも積極的に取り組んでいる。そして、田中さんをほうふつさせる坊主頭の少年が、いつも登場している。

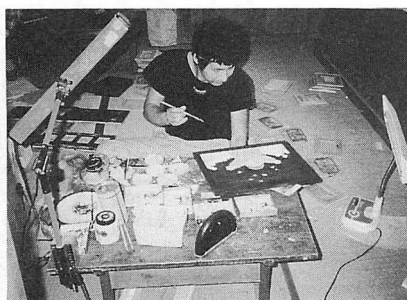
●子供の声を再び

田中さんの住んでいる川内町滑川地区は人口二百人、世帯数八九戸。地区の行事にもよく参加するという。カラオケ大会などでは、得意のギターを抱えて歌を披露し

たりすることもある。今ではすっかりと地域の中にとけこんで、山里の生活を謳歌している。当分の間、この地を離れる気持ちは無いとも。

これからのテーマとして作っていきたいものとしては、①無人島の公衆電話②木造校舎の生活風景③お祭りの様子、などを取り上げたいという。

そして、この校舎に子供たちを集めて絵の中の世界ではなく、本物の子供たちの声を響かせたいのだという。その一連として、子供たちを集めて宿泊まりさせる「わらんべ合宿」をやっている。
今でこそ廃校となってしまった



建物ではあるが、見直しされてまたいつの日か、本当に子供たちの歓声が響く時がくるかもしれない。

●終わりに

やすらげる環境の中でできる作品とその作品を見る人に与えるやすらぎ。それは、どちらも猛スピードで走っている現代社会では大切な感覚ではないかと思う。子供の時のことを、ふと思ってみると、夜おそくまで遊んでいたのも、何と時間の経つのが遅かったことか。大人になればなるほどそのスピード感は早まってくるような気がする。

田中さんはこれからも、このすばらしい環境の中で「失ったものに対する郷愁」を「木の絵本」で表現してくれることだろう。

「わらんべ工房」に名残を惜しみながら、やすらぎの空間を後にすることにした。工房から一歩踏み出したときに照りつける夏の太陽は、一際暑かった。

△取材・ルパン▽

季節に香りを 感じて

松前町

三好 道子

とくしゅう・・・

毎日時間に追われる生活の中で、ふと自分を取り戻すために、私は野山に出かけます。

野に咲く花、色づく木々の葉や実、鳥の声、その中で、昨日とどこか違う光の色、風の音、季節を感じ、自然界の偉大なエネルギーを吸収し、ホッとしながら帰途につきます。

目には見えないけれど、新鮮な花の香りのささやき、若葉の匂いを体中に感じながら……。

地球からの偉大な贈り物の“香り”の中には、決して合成できないものがあります。



三好 道子 さん

では、その“香り”とは一体何なのでしょうか。

五千年前もの昔から、人類は香りを上手に生活に取り入れてきました。

古代エジプト人は、香りを神聖なものとして、宗教儀式や呪術の場で用いていたそうです。

そうしてギリシャ時代を経てローマ時代へと、はじめは貴族階級から、やがては広く一般の人々へと、香りは優雅な楽しみとして、長い歴史の中を語り継がれてきました。

昭和六十年代に入り、自然思考ブームを境に生活が豊かになると、ゆとりの時代、心の時代へと五感に訴える時代になってきました。

香りの持つ様々な精神的効用が認められる様になると、ストレスの多い現代にどうしても必要不可欠となり、知らず知らずのうちに生活に取り入れられる様になってきたのです。

生活の中で香りを探してみると、意外と様々な場所で見られるのがわかります。トイレ、バス、キッチン、リビング、etc.

“アロマテラピー”、最近よく耳にする言葉です。これは香り療法といって、香りと健康が医学的にも親密な関係にあるということです。そして、アロマテラピーに利用されるものとしてハーブ（香草）があるのです。

では、そのハーブについてお話ししましょう。

私は現在、喫茶店を経営しております。建物は森林をイメージして、ログハウスにしました。松から発散されるフィトンチッドの香

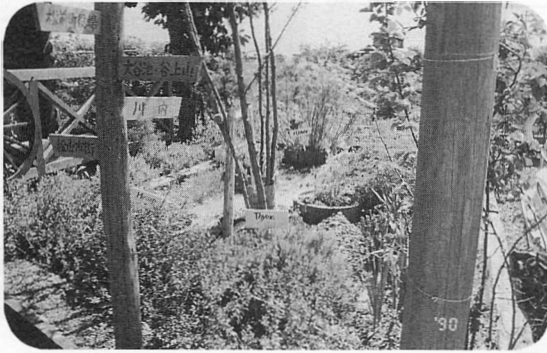
りには、人間の神経を落ち着かせる働きがあります。そしてメニューの中には、体調を整える為の、ナチュラルでヘルシーなハーブティもあります。

北海道に咲くラベンダー、身近なところでは、ヨモギ、どくだみ、昔からお料理によく使われているニンニクや生姜、パセリやセロリもみんな薬効のあるハーブです。

私は今、庭や畑に五十種類余りのハーブを育てています。五年程前に、友人に一鉢のミントをいただいたのがきっかけでした。ミントに触れた時の、あのハッカのさわやかな香りが、私にはとても新鮮な驚きだったのです。それから



ハーブたち



というものを、ハーブのとりこになって、次から次へと育ててみたくなり、先ず土づくりからはじめました。種をまいて、小さな芽がひょっこり顔をのぞかせた時の喜びは今でも忘れません。こうして今では、五十種類余りのハーブ達が、先を競って花を咲かせてくれるのです。お客様にも好評で、体調に合わせてブレンドしてさしあげると、とても喜んでいただけます。

一つ一つのハーブは地味ではありますが、驚く程のさわやかな香りを放ってくれます。私が落ち込んだ時、淋しい時、ハーブに水を与え、鮮やかなグリーンが生き生きと甦るのを見ると、不思議に力付けられるものです。自分の大好きな香り、気持ちの良い香りがアロマコロジョーとして、ストレス解消に効果を発揮してくれるからなのでしょう。

毎日お店に来て下さるお客様、初めて扉を開けて下さるお客様、お子様連れで遠くから来て下さるお客様、一枚のハーブに興味を持ったのをきっかけに、このように人と人がめぐり会い、語り合い、



jasmine tea
mint tea
cinnamon tea
apple tea
hibiscus tea
.....

ふれあいを育んで下さる場所が出来、お客様との交流が広がり、新しい世界も広がってきたのです。それが、私にはとても嬉しく、貴重に思えるのです。もっともとやさしさを体感感じて、心美人になれるよう心掛けながら、また、子供のようには好奇心を失わず、いろいろなものを吸収していかなければならないと考えています。そのためには季節を一杯感じ、自然の与えてくれる微妙な香りに気付きながら、心豊かなゆとりのある生活をしてゆきたいと願っています。

白石 知宏



この川を中心として沿岸に開ける平野に大小十五集落が散在しており、気候にも恵まれ、米、野菜、果樹、たばこ等の栽培を主体とする純農村です。

豊かな水と緑の自然環境景觀に恵まれた本村は、地域の特色ある歴史、伝統、文化を生かし、独創的で個性的な地域づくりを行い、「水と緑と文化の里」をテーマに活力と

◎味覚の里五葉ごよう

このように、水あり、緑あふれる豊かな自然に恵まれた中で、春は山菜、竹のこ狩り、秋は栗、しいたけ、山芋と四季を通して味覚を料理する「五葉の里」があります。

この味覚の里は、自ら自然と親しみ、自然を料理していただく方々の憩いの場として、開放しています。訪れる客は、多種多様ですが、俳句会、茶人、花会、料理グループ等実に自然を愛する方が仲間同志、又家族ぐるみで四季おりおりの味覚を楽しむ等さまざまです。「五葉の里」を訪れ、豊かな大自然の中で、歌を詠み、水と親しみ、野花と戯れ、一日を過ごす

す、これが五葉味覚の里であります。

「夏うぐひす」

日は杉小立こたち

わたりゆく

「栗ひろいし」

掌てにやわらかき

かけひみず
算水

この句は、五葉味覚の里を訪れた、いたどり・うずしお句会の人
が詠まれた句であります。

又、五葉の里には、個性豊かな活動をグループ同志助け合いながら実践している二・三例を紹介します。

。峠窯：京都での修業を終え、地元朝倉に開窯し、地名をとつとうげがまて「峠窯」と名付け、日常食器を一つ一つ手づくりで、想いを込めて作っています。

。まえがわらサロン：自然の恵みにより収獲した、竹のこ、しいたけ、栗、山菜等四季の味覚を味わっていただく場を提供し

ています。

。小千の宮遊鶏…ふれあい農園を開設し、地どり卵が取れ、くぬぎ林の中で、アウトドアキャンプや自然に親しむことができます。

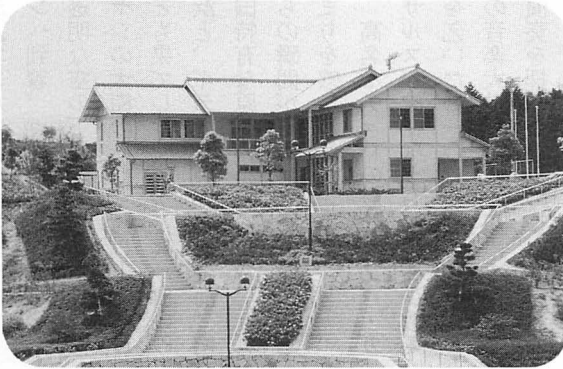
。しいたけ、山菜とり、山芋掘り、炭焼きなど15名が、それぞれの持味^{もぢみ}を出し合い、訪れる人へ憩いの場を提供し、又着々と準備をしています。

◎文化の里づくり

朝倉村は、先人の英知とたゆまない努力によって培われた文化発祥の地と言われた歴史ある村です。しかも県下最大規模の古墳群が貴重な文化遺産として地域の隅々に残っております。昭和五六年から始まった圃場整備事業前の試掘調査から、弥生住居跡や遺構、土器等が出土し、住民の古代文化に対する関心も非常に高まっており、村民総意による「ふるさと美術・古墳館」が建設され、それら出土品や、村の古代を紹介する映像システムと共に展示、伝承されています。

ます。

次に「まちづくり特別対策事業」の指定を受け、総面積四七haの緑のふるさと公園が今年度完成します。主な施設として、多目的グラウンド、テニスコート、アーチェリー場、ボブスレー、チビッコ遊具などが配置され、それらを囲むように全国の県木三百本が植栽されています。



ふるさと美術
古墳館

自然を
料理



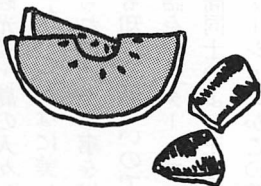
又ふるさと緑を守る「緑の少年団第一号」が朝倉村に誕生し発祥の地にふさわしい記念碑を建立、全国的にもめずらしい県木の森を整備しています。

◎これからの村づくり

昭和二十五年瀬戸内海国立公園指定を受けた笠松山（三二八m）を朝倉村のシンボルとし、「水と緑と文化の里」づくりを目ざしていますが、架橋、高速道路、リゾート新時代と言われている波に、村民あげて対応していかなければならないと思います。

昭和四七年オープンした今治カントリークラブや地場産業のタオル工場の進出等、村を取りまく環境は、「えひめ瀬戸内リゾート構想」の承認により、一段と二一世紀に向け変貌すると思います。

自然を愛する心を忘れず、時代に合った新しい村づくりをお互い知恵を出し合い進めてまいりたいと思います。



音楽と 自然への讃歌

松山市

上田 真二

とくしゅう・・・

△チエロに魅せられ

新居浜市内に住んでいた小学四年生の時初めてチエロ演奏を聴き、「こんな美しい音色を持つ楽器があったのか。」と身体中カーとなりすぐ両親を説得し、習い始めたチエロ。

二十一才で留学生としてプエルトリコへ行く途中、機上・市内見学で知ったサンフランシスコの街。各家々には塀が無く、芝生がきれいに刈られていて緑が一杯だった。住宅の色は統一され、広告等もない。町並み全体が何と自然だったことか。その上日本からの留学生に大変親切。

そして一週間後、カリブ海に浮かぶプエルトリコの首都サンファンへ到着。カッとまぶしいくらい透明な空の下でスクスクと茂ったヤシの大樹の群れ。行けども行けども果てしなく広がる真っ白い砂浜と、ギラギラ輝く五色の海。南国特有な原色の素晴らしさ。これらの瞬間が確実に「新世界」の始まりを感じさせた。

高名なチエロの巨匠パブロ・カザルスが健在なうちに、ぜひ教えるを乞いたい一心で、プエルトリコの音楽大学へ入学。初めて先生の演奏を拝聴した日のことは忘れる事が出来ない。

当時九十二才の先生は少しヨロヨロした足どりでホールへ入ってきた。しかし弾き始めた瞬間、全く別人のように若々しく精気あふれる偉大な芸術家の姿を見た。余分なものが全く取り除かれ、厳粛で荘厳な音から創造される音楽の前に私は全身が痺れた。それまでの音楽観からは想像すら出来なかった音楽に出会った。「この世にこれ程までに神々しく美しい音楽の

世界があったのか。」と歓喜し、泣きながら深々と頭を垂れていた私。

△ふるさとを知り、そして愛す

プエルトリコは米国の自由連合州で、スペイン語と英語の二カ国語が国語。これらカリブ海の国々では、アルバーバ・キュラサオといった島々でも国民が五カ国語を普通に話す。米国・欧州諸国間の政策や戦争の結果により、度々国語が変わったという影響があったのも事実。しかし、私が演奏旅行の

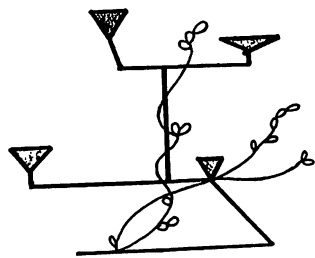
際会った文化観光省・島の人々が「我々の国は神からこんなに美しい樂園を与えられた。その事を世界中の人々にも知って欲しいので、国策で五カ国語をマスターしているのです。人間同士のより正確で深いコミュニケーションがこの美しい樂園や我々に、誇りと豊かさを与えてくれる。これらを守るのは私達住民しかいないのです。」と話してくれた事が思い出される。国民性が陽気ですごく人なつこいし、国全体が例えようもない程美



しい南国の楽園だった。

この後私は南米のブラジルへ移る。サンパウロに住んでいた頃、ある友人が管理するアマゾン流域のマットグrosso州内の牧場に招待された。牧場と言っても、面積は愛媛県の三分の一の大きさ。その大きさはともかく、私が感激したのは大自然が生み出し、繰り広げる数々のシンフォニー。ここでは自然の音以外何も聞こえない。

三百六十度何処を向いても、見渡す限り空、空、空。その夜空からたくさんの星が近くで、歌ったかのように話しかてくる声が聞こえてきそう。人々や・馬・牛・小鳥の話し声が、何処からかはっきり聞こ



えて来る。この大自然の中で住んでいる人達の顔が豊かで、生き生きとしていたのが印象深い。

このような色々な思い出を持って帰国し、早いものでもう九年が経つ。帰国時、成田空港で数多くのJALマークを見て涙し、新幹線の窓から見た雪に歓声を上げた事が嘘のよう。それほど日本の生活リズムが早く、変にアメリカナイズされており、ラテンぼけの私にはしんどかったし、今だに理解したい事があります。久し振りで自分の国に帰って来たのだから、日本語を読んだり聴いたりしたいと思っても、テレビや雑誌、商店や広告のカンバンにまでやたら横文字が目立つ。こんなに美しく、味わい深い言葉を持っている国なのに、どうしてインスタントな外国語を使いたがるのだろう。ふるさとや国家の長い歴史の中から創り上げられたものを誇りに思い、大切にしている心は失いたくないものです。まず自分の国を知ってからこそ、今流行の「国際化・国際交流」がより意義深くなると思います

す。外からの物真似だけではダメ。

△やすらぎとは

例えば、もともと日本人は静けさや四季折々の自然を愛していたはず。それが今日本は音の氾濫時代。チリ紙交換・パン屋・ラーメン屋等の宣伝カーや選挙シーズンの応援演説カー等々から流れる音量の凄まじさ。たまに静かに飲もうと思っても、どこもカラオケ。

このような日々からは、なかなか「やすらぎ」が得にくいのでは。人間、自分の持っていないモノを他に求めたがります。だから県外や外国に行き、一時的に美を満喫するのもよい。県内にいろいろリゾート施設ができるのもありがたい。でも私は、日常生活の中にこそ自然なやすらぎが大切だと思う。例えば、我々がいつも接している瀬戸内海。以前の美しさを知っているだけに今、その変わりように胸が痛む。それだけに今全ての人が、我々の住んでいる海・山・川・街を少しずつでもきれいにしようとする思いが、情熱が必要で



はないでしょうか。濁っている瀬戸内海、ゴミがいっぱい落ちてる愛媛の街や道路に私は長年惚れてきた訳ではない。美しい『愛らしい媛』にぞっこん参っているのです。いくら立派な大樹でも、幹が腐ればどうしようもないのと同じ。自然を生かすのも人間、人間を生かすのも自然。言い換えると、自然を殺すのも人間、人間を殺すのも自然。このように思えてならない。

それにしてもカザルス先生が言われてた「自分の祖国や故郷を愛せない人間が、どうして音楽を愛し、立派な演奏が出来るだろうか」との言葉が、私の心の中でより強く響いてくる今日この頃です。

ふる里づくりを 見てござる

北宇和郡松野町松丸

柳野 治示

とくしゅう・・・

●地蔵さんが見てござる

私の生まれ育ったのは、北宇和郡松野町、山里で僅か二〇戸にもみらない祝井（いわい）という所である。大変縁起のよさそうな地名なので気に入っており「上から読んでイワイ、下から読んでイワイ、中に和のある祝井だぞ」などと言いながら今年五十三回目の誕生日をここでむかえた。

それは今から九年前のことであった。人々は寂れ行く我がふる里を生きがいのあるふる里にしよう一念発起し、地区の古びて壊れかかった「お堂」を立て替えて集会所にすることとなった。

壊し始めてこのお堂に安置され

ている「子安さん」が問題になった。私は幼い時からある地蔵さんが子安さんとは知らなかった。調べてみると一五〇年もの間私たちの暮らしをじっと見つめていたのである。

●歴史を刻む

改めて、お堂の回りを見ると、享保一三年に建立した飢饉の苦しみを刻んだ地蔵が見つかった。

「世稲豊多く秋熟全く實らず
忌有の歳故邑衆これを悲歎
今ここに地蔵尊を安置せん仰
禮敬して永く穀稼増秀豊饒を
誓う者なり

時に享保一三年

戊申 仲冬日

（松岡明宏氏訳）

・記録を調べると宇和島藩では、享保一〇年頃より連続して害虫と旱魃で苦しんでおり、享保の大飢饉は享保一七年であり、その後も苦しさが続いたものと思われる。

この地蔵と子安地蔵は、これを

機会に町指定文化財となった。

地蔵さんたちは、私たちの暮らしを見つめながら先祖からの言葉を語りかけていたのである。

●子々孫々のために

わたしたちは、

集会所の側に小さなお堂を立て供養をした。そして「ふる里づくり」は、今の自分たちだけでなく、子々孫々の幸せを願うものでなくてはならないことを認識したのである。

そして、生き

甲斐のあるふる里づくりに取り

組んだのであるが「この取り組みが今から五年、十年あるいは百年経ったときどう評価されるのだろうか」と歴史の批判に耐えられるのかと、遠い先のことを思う。



●長い目短い目

改めて地区内を眺めると、小さな集落なのに随分と改善すべき課題が多い。ふる里づくりのための「地域づくり計画書」を策定することとなった。基本目標を「住みやすく生きがいのある郷土をめざして」とし地域の現況、問題点、課題とその対策を調べて気が付いた。そのほとんどが不潔、不便、不安の三不であった。その一つ一つが「住みにくいふる里」を構成している。

皆で調査した項目は、人口所帯数、土地利用、道路交通、防災安全対策、集落自治など一四項目にのぼった。緊急に改善を要するもの、改善が理想とされるものと、様々である。

この計画書の策定が皆を「そういう風になりたい」「やってみよう」



柳 野 さん

という気持ちにさせた。目標にはなかなか到達できなくても「理想の絵」を描くことで、常に問題意識と希望を持ち、ふる里づくりを長い目と短い目で眺めながら実施している。

●個の輝き

昭和五八年地区の広場に鯉のぼりを連ねて揚げることになった。知人からビデオで録画させて欲しいとの申し出を受けた。私のビデオとの出会いである。この時のVTRはテレビ局で「わたしのビデオ」という番組で放映され、皆で感動した。まだ、この時ビデオカメラは殆どお目にかからなかった頃である。そして「自分の手でふる里の出来事を記録してみよう」とこの時にきめたのである。

以来今日まで七年の歳月が流れ、記録したVTRテープは増え続けている。ビデオカメラのファインダーを通して見るふる里や人々の姿は違ったものに見える。画面全部が一人の顔であったり千人の人であったりする。

ファインダーを見つめながら、とめどなく涙がながれることもあった。ひた向きな人の生き方に感動をおぼえたこともあった。

そして、画面いっぱいになり一人一人が輝く姿が写し出される時、素晴らしい、ふる里づくりが出来ているのだと思う。



どうだ!!

テープの山・山・・・

●ふる里はだれのもの

最後に一通の手紙をご紹介します、結びとしたい。

原文のまま

突然にふしつけなお便り致します失礼をお許し下さい。私たちは松野町豊前出身の老夫婦でございます。

柳野さま先ず昨年の私の「ハガキ短信」の原文をお読み下さいませ。

待つ人となないふる里だが、年

を重ねるごとに父母を恋うように故郷に思いを馳せる。最近NHK夜のローカルニュースにビデオ通信があり、頻繁にふる里便りを届ける地域の有志の存在を知った。ある期待をこめて六時五〇分を待つ。松野町柳野治示さんの文字が走る。「あったあ」と大声で夫を呼ぶ。岩に渦を巻く雪輪の滝。友と水浴びに興じた広見川、秋祭りで賑わったなじみの町並み、哀愁を誘う五つ鹿踊り、三世代交流の運動会、知人はと目をこらす一瞬に消える。

東の間のふる里の風物詩にふれ温かい思い出が臉に広がる。成長期の心のひだにくっきりと豊かな風土を刻みこんでくれたふる里にありがとうを言いたい。

ひたむきな行動力で鬼北地方のホットニュースを追い求め画面に登場することはうれしい限りでございます。

この奇特なご奉仕がなお続きますことを祈っております。

乱筆ながら先ずはお礼まで。ご健勝をお祈り申し上げます。

"ひとが輝き、まちが輝く"

——第八回逆手塾レポート——



(財)愛媛県まちづくり総合センター

山 本 幹 男

研修レポ

◎まちづくり人の祭典

「人源（人間と資源を併せた略語）がごちそう」をキャッチフレーズに、去る六月九日・十日の両日、第八回逆手塾（過疎を逆手にとる会主催）が、広島県総領町「ふるさとセンター田総」で、全国から二百七十余名のまちづくり人が集い、華やかに開催された。

以下、塾報告を織り混ぜながら私の独断と偏見の塾リポートとしたい。

◎逆手塾

陽光まぶしい「ふるさとセンター田総」、周りの田園風景と異なり、全国から集まったまちづくり人の熱気がむんむん。心が踊るようなミュージックが、スピーカーから流れている。会場は人が一杯で、何となくフットワークが皆軽そうである。

塾が始まった。司会の宮崎さん「今日は凄いですねえ。何かが起こりそうな予感がありますねえ。」

と、過疎逆流の乗りを一発。セレモニーの後、メインゲストの大山町大山町の緒方英雄さんの記念講演。

大山町は、皆さんよく御存知のとおり、地域おこしの先進地として有名で、特に二十数年前から矢幡前町長の下、「桃栗植えて、ハワイへ行こう」等のキャッチフレーズに代表される、三次のNPC運動を展開、イスラエルのキブツを中心とした海外研修、また最近では、CATV事業や販売用の米の生産中止など、画期的なアイデアを打ちながら、まちづくりを推進中である。緒方さんは、それらの取り組みの仕掛人である。

「記念講演の要旨等」

『大山式町民変革術』と題して、講演いただいたので、その要旨と、次の日の分科会の内容を、語録形式で簡単に紹介したい。

- ・町民の意識改革に果たしてきた役割として、イスラエルのキブツへの派遣研修制度が大きい。
- ・現在、町あげてCATV事業を

推進しているが、これは、町民あるいは、町内の隠れた資源に見方を変えて、スポットライトを当ててみて、こないない物が、面白い人が…と、再発見していく手段として捉えている。

いいものはいいい、と評価する仕掛けとして取り組んでいる。

・役場での意識変革は、内部の研修により行っている。「役場が変われば、町が変わる。」役場の中を、たえずかき混ぜることが、役場内に活力をもたらし、引いては、町内が地域が豊かになることにつながる。

・町民の意識変革の一つの手段として、いいアイデアをマスコミでPRする等、よいしよすることもいいのでは…。

・大山町の振興に当たっては、町内に若者が好む職場を生み出す努力を続けている。町内にはなく、町内の人が、あるいは町が払っているものを、町内で行うことが出来ないか、考えている。

◎ 人源醸成パーティ雑感

当たり前かも知れませんが、やはり逆手塾の目玉はこれなんだと。『奥田祐子とザ私たち』のメンバーの軽妙かつ真摯なステージに始まり、各県から来た面々の自己PRやお国自慢を織り混ぜ、よいしょしながら進行する。ここに過疎逆流接待術の一端を、垣間見たのであった。ステージと会場が一体となった進行が素晴らしくその苦勞も察せられた。

しかしながら、過疎逆は、感動商法、自分たちが楽しくなければ基礎にある。もちろん、楽しくなければ、来なくていいのではあるが、ステージ上でのパフォーマンスや歌も、ほどほどがいいように思う。間には、音楽のない飲みニケーションや雑談時間が、あってもよかったのでは：と、感じた次第である。

◎ 交流とビジネスチャンス

参加者は、北は北海道から、南

は鹿児島まで、ほとんどの人は、沸騰ワークで熱党ワーク（交流）を求めて訪れている。

この塾は、勉強の場というよりも「人源がごちそう」と歌っているごとく、人との交流、感動の交流をごちそうにしている。進歩自由夢もメインゲストも、何か、さしみのつまのような気がする。

一方、この塾の隠しテーマとして、「異業種交流によるビジネスチャンスづくり」の感を強く持った。と言うのは、この塾で総領町には、二百万円のカネが落ちる大きなビジネスである。又、会場内には、過疎逆の出版物や地域の特産品、イベントPRなど、さりげなく、したたかに置かれている。

過疎逆の事務局長の宮崎さんは、「この出会いが、ビジネスチャンスになるかもしれませんねえ」と。豊かな暮らしを言うとき、経済的な基盤は、前提条件であり必須の条件でもある。

従って、この塾に参加される方は、人源醸成とネットワークづくり、自分の町・村のPR、逆手塾



を逆手にとり、自分のまち・むらを、積極的に売り込む手段として捉えていいと思う。

◎ 過疎知の時代

過疎を逆手にとる会は、皆さん御存知のように、「過疎をなげくことをやめ、過疎地にしかない可能性を生かして、胸はれるふるさとづくりを進める活力源にと」発足した経緯もあり、何せ出たがり

目立ちたがりの元氣印人間ばかりなのである。過疎地に生む自分たちの知恵と元氣で、自分たちの思いを、自分たちが面白い、楽しいイベントに翻訳して、地域の全国の人たちに、感動商法として売っている。それが、ビジネスになれば、したいと、あくまでも、しなやかにしたたかに生きている。

先出の緒方さんによれば、「知恵のある町村には、いくらでもカネが落ちてくる。地方こそが、これからはカネが落ちる時代になってきた。」と言うのである。

そこから辿りから、過疎逆の今のキーワードは「過疎知の時代」だそうだし、又、来年の逆手塾のテーマは、「オンラインワン勝負」だそうであるから、こんなキーワードが、次々に全国に発信されることだろう。

まあ、何はともあれ、人々の出会いを大切に考え、そのコミュニケーションを強調した逆手塾、引っ込み思案人間の私にとっては、いささか風当たり、人当たりが強かった二日間であった。

書芸術の町上浦の 将来展望に向けて

上浦町歴史民俗資料館

館長 越智 至

みなさん、いかがお過ごしですか？
今年の夏も残りわずか。楽しく
すてきな過ごし方を考えましょう。
今回は上浦町の越智さん
からのあたよりを紹介します。

⑤

上浦町歴史民俗資料館が開館したのが昭和五十七年四月であった。その時上浦町の文化活動の一つが明確に打ち出され、開館行事の目玉として、「現代日本名家書展」が、特別展として開催された。開館行事の参加者一千五百余名。

上浦が書芸術の町として文化活動の表舞台に登場することができたのは、郷土出身の書家で、日本芸術院会員の村上三島先生がおられるからである。

上浦町歴史民俗資料館では開館以来、特別展として三島先生のお骨折りで、現在日本書道界の主たる各会派の役員選抜書展を、三か月単位で連続七年間開催してきている。

そのおかげで、地元の書道愛好家は毎月一回大阪から三島先生を迎えて「書道教室」を開いて、直接三島先生の指導を受ける機会に恵まれている。

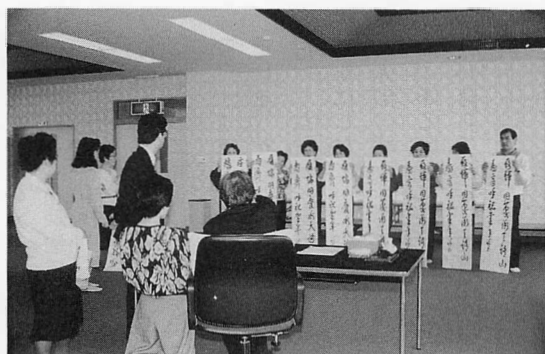
小・中・高校生は、東予市出身

で三島先生の門下安藤靈山先生を迎えて、毎週日曜日に習字教室で指導を受けている。この青少年は百三十名、毎年三月には、新入希望者の調整で歴史民俗資料館の担当者は苦勞している。しかし町としては町内の習字希望者が多くなって、将来書道愛好家の裾野が拡大することは、単に書の町上浦の発展ばかりでなく、こどもたちの将来のためにも大変いいことではないかと考えている。

毎年秋には「今治・越智郡小中学生書道展」を開催しているが、その出品者も三六七四名と年々その数をふやしている。一週間の短い期間だが、小中学生の作品展は父兄の関心が高いところに特徴がある。

現在上浦町歴史民俗資料館の収蔵庫には、現代日本書道界の代表作家の作品二千二百点余りが収蔵されている。

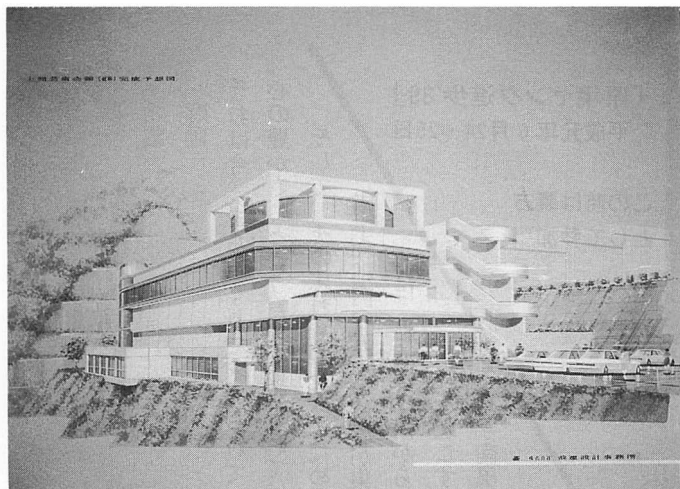
また絵画の方では元大阪芸大教



村上三島氏直接指導



安藤靈山書道教室



◀ 上浦芸術会館完成予想図

授で日本画の村上景雲先生の出身地でもある。

景雲先生の大作「原生林」「さいはての岸」「雲海」「大台ヶ原」など十数点の日本画は温厚な先生のお人柄とも思えぬ凄さを感じさせるものばかりである。

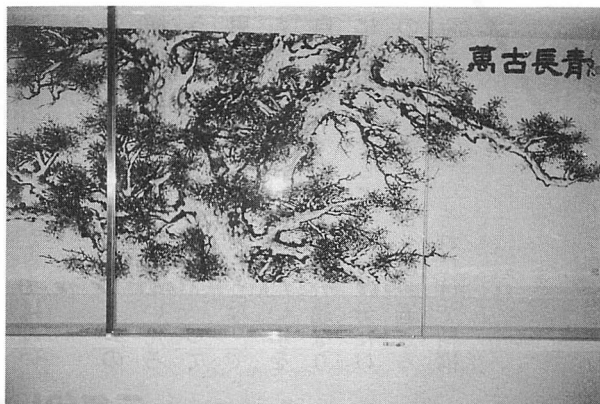
そうした芸術家に恵まれた上浦町は、いま上浦の芸術の殿堂として、歴史民俗資料館に隣接して、十億の巨費を投じて「上浦芸術会館」（十月完成予定）を建築中である。

芸術会館三階展示場が現在の歴史民俗資料館特別展会場に廊下がつなぐと、三つの大展示場が完成するわけである。

新館の大展示室の広さは七、九三六平方メートルで、小展示室は二、九二九平方メートルである。いずれも書作品を中心に、中国や日本の文人画と日本画など、三島先生のお骨折りで真に「芸術会館」の名にふさわしい作品展を開催し

て、日本の芸術愛好家の期待にこたえていくべく作業を進めている。

村上三島 共作 平成元年3月作
董 寿平





「県境ヤング進歩'89」
平成元年 6月24・25日

この時は裏方
として参加

忘れものをしていませんか？

「青春」

「夢」

「希望」

「感動」

それは今、まちづくりで求められている
“心の豊かさ”という言葉で象徴されている。

そして、その忘れものを探するために、

南宇和郡内の五人の若者が集まっ

た。私達は、南から新し

い風を起こすべく

「南風（マ
ジ）」

忘れものを探して……

マ
ジ
「南風」



と名乗り、平成元年という大きな波と共に活
動を始めた。

「ぶつけるものがわからない青年が多くなっ
た。」とよく言われるが、私はそうとは思わな
い。昔も今も若さのエネルギーは皆同じ。た
だ、表現の方法が違うだけ。そんな彼等に、
生きがいを感じる様な感動・充実感を味わっ
てほしいと願いはつきない。とは言っても、
私達五人も試行錯誤の真只中。日々の生活の
中で、楽しく満足感を味わうためには、人に
対して、地域に対して、たよられる存在であ
ることが大切だと思う。まちづくりの中で、
まちを思い、人を思うことを忘れて何が出来
るだろう。

自分の思いをありのままに表現して、何も
のにも替えがたい感動に出会えた時、
それは、心の中でピラミッドの
ように積まれていくだろ
う。少しづつ、そ
してどこま
でも

高く…。

“ある若者の独り言”

最近若者に元気がないなあ…。
何か生き生きしていない。多分、
皆んな何らかの夢を持ってはいる
んだろうけど。はっきりした理由
もなく、なんとなくあきらめて、
なんとなく一日を過ごしている様
に思える。しかしそういう僕も、
いつかチャンスがあればと考える
だけで、ただ計画を練るだけで終っ
てしまっているのではないだろう
か？。努力や執着心を怠っている
自分を無視しているだけではない
だろうか？。

他人には僕達の活動はビエロの
様にしか見えないんじゃないだろ
うか？。「何やってんだ？」って
思っている人も多いだろうな。で
も僕達は、自分達のやりたい事を
自分達の手で実行し、自分達なり
に満足し、そして、流した分だけ
のおいしい酒を飲む（飲み過ぎる
時もあるけど）、それだけで結構

…… 元氣印レポート ……



「県境クラシック in X'mas」
平成元年12月23日

自分達の手で初めてつくった
コンサート（出場者を囲んで）



「大野ヶ原モウモウ塾」
平成元年8月10～13日

リーダーとして参加

楽しいもんなあ。「廻りで見てい
るだけの、あなた達よりはマシで
すヨ。」なんて言ってやりたいな
あ。それにしても、誰か何か気付
いてほしいなあ…。

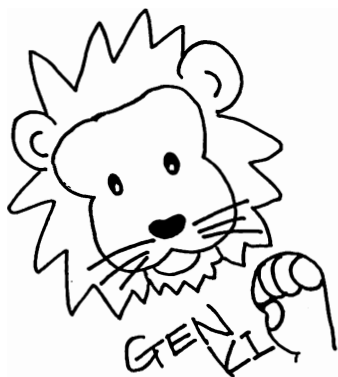
会を結成して二年目の南風であるが、未だ
路頭に迷っている感がある。しかし、五人の
メンバーのそれぞれ心底に持っている想い、
描いているイメージは素晴らしいものがある
様な気がする。ただ、それを形（行動）にし

ようとした時、様々な障害が出てくる。資金
源・人集め・内容のマンネリ化等、その他色々
な諸問題を解決していかなければならない。
しかし、自分を信じて行動していれば自ら道
は開けてくるだろう。そしてきっと、僕達に
賛同してくれる若者が増えてくれる事を願う。
そのためには、日々の生活の中からの、より
広いネットワークの形成・人脈の拡張により
自分を磨くことが必要であるように思う。

ネバーギブアップ 南風



…… 元氣印レポート ……



こんにちは！

「ピエロン」です。

川之江市 園 川 悦 子

.....
元氣印レポート
.....

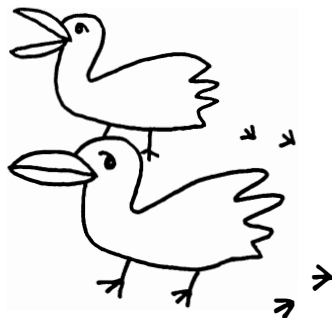
はじめまして、私達は川之江のお母さん達でつくっている、人形劇グループ「ピエロン」です。三年程前、その頃の川之江幼稚園で、子供達を通して知り合った、お母さん達が集まり、子供達に夢を与えたいと考えて結成しました。

今はロンというマスコットボーイのピエロの人形を中心に九人で活動しています。毎週火曜日が練習日なのですが、みんな、おしゃべりの大好きな、たのしいお母さんばかりなので、時には練習が、社会問題、公害問題、子育て論、今晚のおかずの話なんかになってしまいます。それでも、この一見、役に立たなそうな、井戸端会議から、よりよいチームワークがつけられているようです。とにかく

明るく、ステキなグループです。

ここで私達のグループの特徴とこの三年の歩みで教えられたことを少し、お話ししたいと思います。

私達の人形は、全部メンバーや子供達の古着やいらなくなった物で作られています。それでも、ちっともみすばらしくないんです。どう考えてもゴミ箱にはいって役に立たないようなものでもちよっとした工夫で息をふきかけてあげたら、また動き出します。



…… 元氣印レポート ……



買えば何でも手にはいる現代の物質文明の時代に、この「手づくり」は最高のオシャレだとは思いませんか。今までの出し物は「ブレーメンの音楽隊」「さるとかに」「オズの魔法使い」です。シナリオ、人形制作、ふきこみ、練習、本番という過程の中で、メンバーのおたがいの良さを発見したり、自分の中の気がつかなかった面を見つかりして、自信が湧いてきたりします。もちろん、ときには意見が違ってぶつかりあうこともあります。それをふみ台にして

最後には「子供達に、たくさんの夢を」という原点に戻って、仲良くスタートすることができるようになります。こんな時は、とてもうれしいです。もちろん失敗もあります。何となく気がのらなくて、練習不足の時の本番での失敗は、とてもさびしいものですが、一生懸命練習した後の失敗は、一つの成長の大きなステップになり、「失敗は成功のもと」の言葉通り、新しい



でも、果してそうでしょうか。力の弱い人間でも、それぞれの個性をいかして力を合わせてやってゆけば、それこそ大きな力となって、夢を実現させてゆくことができるように思います。小さな物だからこそ大切に、弱い者だから大切に、小さな町からみんなで力を合わせて出発しよう。

工夫やアイデアの源になるような気がします。はじめは単なる人形劇だけだったのですが、思いがけず、たくさんの方の事を教えられ、この三年間、メンバー一人一人の生き方にも深くかかわってきているように思います。今の若い方々は、大きな町にいかねければ素晴らしいことができないと考えているように思います。

「素晴らしい『信州の旅』で…」

それは、素晴らしい『信州の旅』でした。

時は六月初旬。所は風情ゆたかに絵ごころ誘う千曲川…。その情景は、白銀輝く北アルプスを背に、標高千米を越える濃緑の山々が三方をめぐる…里から里を巡訪する旅でした。

しかも、連れは「町」「よもだ塾」の面々十人。ハタチ代から七十代までの各世代。職業はまちまちで女性三人を含んでいます。おまけに、「行をナビゲーションして下さったのが、信州大学の桜井善雄教授なんです…」

ともあれ、その第一歩は小布施町でした。まずは、延長一杆の小布施橋の下に発達した千曲川の河川敷で…、自然環境のお勉強から始めましたが、私の喜びはその後でした。それは、私が

ここ三年ほど希い続けてきた、小布施の『町並み修景』を見学できた上に、ぜひお会いしたいと思っていた、市村次夫さんの爽やかなお話しが聞けたことです。

希いは、私の課題『人間サイズの地域づくり』。わけでもその基盤となる『人間サイズの経済活動』の話を、地域企業の経営で実践されている方から伺いたい…と、厚かましくも市村さんに狙いをつけていたんです。

ご存じでしょうか…、市村さんは町の栗菓子のお舗「小布施堂」の若い社長さんで、案

にたがわず、その経営ビジョンと実行力は、新現代の一流企業人と拝聴したんですが…、地域づくりの世界では、『町並み修景』の実践者として…、つとに著名な方なんです。

「リードは民間発想と文化的感性」

小布施町は、長野市から北東十五杆。千曲川のほとりにある…、人口一万二千人の小さな町で、近年は『北斎と栗の町』として有名です。市村さんたちの町並み修景は、この町を中心…『北斎美術館』に隣接した、一万六

地域づくり 学んで三年 よもやま話ノート

第四話／地域に生きる企業ソロバンの話

えひめ地域づくり研究会議

宮 本 俊 一

千平方メートルの街区を計画地区とし、昭和五十七年～六十二年の間に約六億円をかけ、解体修理や移転・土地交換・土地賃貸等で建物群を再配置して…、イベント広場や遊歩道の巡回機能を創り、町の再構築をされたんですが、その成果は、自治大臣賞や建築の吉田五十八賞などで…、高く評価されました。

私は、二～三の現場説明を聞き、この事業の考え方とその実現への工夫が、どんな細部のことにも行き届き、全く抜かりがないのに驚嘆したんですが、最大の驚きは、その事業

理念が、この種の公共的な事業では考えられない、『民間発想と文化的感性』でリードできるような、仕組まれていたことです。

例えば、普通のやり方のように、町の公共業で計画区域の全員が参加する形で行うのではなく、街区の修景をしたい者だけが出来る範囲で行う方式です。だから事業主は、小布施堂・長野信用金庫・民家三軒と小布施町だけの、全く立場が違う六者共同でして、『自分の所は自分で自分がする…』方式で、各々の発言権はイーブンの仕組みなんです。勿論、

町当局も街区の一員としての参加です。また、その「申し合わせ」では「時間を贅沢に使って、仮住居や仮店舗などの艱難辛苦をしない形で進めよう」とか、『出来上った空間の快適性を求めることを主眼として、個々の建物の良し悪しは二義的なものと考えよう』等のコンセプトを、

「官・民の折れ合い」とか、「新・旧建物の調和」等、実施上の具体的事項を取り決める前提として、キッチリ申し合わせているんです。

これは私たちが提唱する、この指とまれ…の地域づくり活動方式が、『街区修景』というフィジカルな大型プロジェクトでも実践できる証左…と思われ、改めての小布施学習を期したのですが、今では事業主外の街区の人や、区域外の人たちにも波及し始めた…と聞

き、ますますその必要を痛感しました。

「地元企業と地域は一蓮托生…」

ともあれこの事業の推進は、市村さんのリーダーシップがあったればこそ…と、思いましたが、そこが私の関心のポイントでした。つまり、この事業は『小布施堂の経営ソロバン』と、どう辻褄が合うのか…です。それに対する市村さんの答は、「この事業への参画は、企業としての小布施堂にとって、当然、通常よりも回収チームが長い投資だが、十分見合うものだった…」と結論されます。

そして、そのレッスンⅠは、「ナショナル・ブランドではなく、ローカル・ブランドを指している『地元企業』にとっては、通常は経営資源とされないものでも…、例えば、地域の自然や歴史・風土・人びとの地方色・町並み…等でも、総て『経営資源』になる…」とされて、小布施堂の経営工夫を挙げての…、納得がゆく説明から始まりました。

レッスンⅡは、「こうした地域の条件を活かして…、地元で生きる企業には、企業の一般的な特徴とされる…、合理性や効率性・普遍性などの追求は、必ずしも当て嵌まらなくて、時には、時間の効率求めに反し、『成熟の概念』を大切にして、非価格競争を模索したり…、普遍性を追わないで、数量や地域な

どを限定的に扱うこともある…」と、私の頭では判るようで判らない話が加わります。

レッスンⅢは結論で、「地元企業がその経営戦略に、こうした地域の条件を組み込むとともに…、地域の繁栄とイメージ・アップを計ることで、自社ブランドを高めようとするなら…、企業の消長も地域の浮沈と一蓮托生となり、地域の活性化とかイメージ・アップは、その企業の投資対象として、十分にペイできる有効経費となる…」とお話です。

しかも、市村さんは、「地元企業の企業行動や企業化は、地域に強い影響力があるので…、その企業情報を地域に還元することを心がければ、地域の活性化に大きく寄与できる…」とされて、「もし、地元企業が地域の作法に従い、その個性を発揮しながら『町並み』に登場するなら…、結果として、地域の産業が『町並み』に顔を覗かせるようになり、生き生きとした『町並み』となるだろう…」と、私たちが『町並み修景』で等閑視しがちな、地域産業の価値を指摘されます。

そればかりでなく、「それは町並みに限らず…、企業が地域に目を向けた時、『地域の時代』は新しいステージを迎えるのではないか…」との抱負を語られました。この視点は企業人だけでなく、総ての地域活動者が見直すべき要事だ…と考えさせられています。

「舌足らず／追加の記」

第一話／少々頭が痛くなる話

「原点は各自が好きな解釈で…」

舞たうんVOL15 頁16

◆ 少々誤解される向きがありましたので…、表記拙文の冒頭に次の一小節を挿入させて頂きます。

「原点は各自が好きな解釈で…」

思い切って言いますと…、私は地域づくり活動というのは、私たちお互いの人生。言わば、個々人の『生きざま』づくりと、全く同じ「根っこ」から生まれる『地域の生きざまづくり』だ…と、思っておるんです。

そして、その『根っこ』とは、私たちの「生きざま」づくりには、人さまに迷惑をかける限り、人さまは勿論、何ものにもとかく言わせない『尊厳』…。「基本的人権」がありますが、地域づくり活動は、その人権を集約し、地域の「生きざま」に表現した…、「地域の生存権」活動だと思っんです。

従って、地域づくり活動は、地域の人びとが自分たちで自決する…『地域自立の活動』であると考えますし、その活動は、地域の人たち個々人の自由な「生きざま」を原点に生まれるものと…、固く信じております。

だから、別に、こうでなければ……云々



Y氏という人物がいる。彼は勸愛媛県まちづくり総合センター客員研究員であり、今、今治市に居る。彼がセンターを去る時、後に続く人の為にと三人の人物を紹介しておいてくれた。

その一人……出島 二郎氏

その一人……森川 茂治氏

そして……出雲 神吉氏

私はつい最近、前二者の講演テープを文章に起す作業をした。どちらも二三年前の講演ではあったが、今聞いても何ら色あせた所がなく、そればかりか当時見えなかった行間(?)が鮮明に見えてきた。

私にとって新しい事件でもあった。「事件なんて大げさな。」と言われるかも知れない。しかし私はこの三年の時間(とき)が過ぎ去らなければ、とうてい彼らを理解できたと

“自由人(まちづくり人)”を斬る

川之江市

守谷 和久

いう範疇に入らなかったと断言できる。否まだ本当には理解できなくて、理解できたような感じになっているだけかも知れない。

出島氏に言わせると、「君は俺を選んだかも知れないが、俺は君なんて選んじやいないヨ。」と私の耳もとで囁く姿が安易に想像される。

出島 二郎とは何者ゾ……

彼はフードピア金沢の仕掛人なり。彼はマーケティングプランナーなり。彼は大酒飲みなり。彼は活字人間なり。彼は彼は彼は、女性が大好きなり……否否否否、彼は一級の人物なり。

森川 茂治とは何者ゾ……

彼は西武百貨店の企画部長なり一村一品運動は教科書に載ると言うなり。まだ若いなり。彼は流通のオーソリティーなり。彼は彼は彼はトーダイを出てるなり……否否否否、彼は一流の人物なり。

出雲 神吉とは何者ゾ……

曰く、「不可解六尺の小軀をもって、この大は計れそうにない。」

まことY氏は、的をえた「まちづくりリーダーの必携人物」を挙げてくれたものだと感じている。

U氏という人物がいる。彼は勸愛媛県まちづくり総合センター客員研究員であり、今、久万町に居る。彼がセンターの研究員だった頃、私は彼から素晴らしい贈り物をもたらした。それは型のある物ではなく、彼が「ヨーロッパから帰った土産」と言うべきモノだった。

それは『自由という概念』という贈り物、それはそれは貴重なモノだったと、そのもらった情景がありありと眼に浮ぶ。

それは、松山から野村へ向う彼の車の中でもらった。

彼は、通常どちらかと言うと寡黙なのだが、行程二時間の間、この時ばかりは喋りに喋った。彼は

何かに取り付かれた様に語り続けた。

私は退屈しなかった。退屈しな
いばかりか、次から次に出る彼の
言葉に、今まで何十年かかって溜
めた私の「自由」という概念のア
カが静かに、そして淡淡と洗い流
されて行く様を、まるで人事の様
に心地良く見ていた。

普通「自由」とかいう言葉に、
あまり大きな意味を付加してなかつ
たし、私が考えていた「自由」な
んで、そもそも底の浅いモノだつ
たと思われる。しかし、それがも
のの見事に覆される時、人は抵抗
する筈だ。しかしながら、川の流
れのようにさりげなく頷いていた。
今考えると、それ程私にとって大
変な事だったと思う。日本の「自
由」は未だ底が浅いと見る。

M氏という人物がいる。彼の手
づくりのレター（ろうそく執報告）
の一文に次の様な言葉がある。少
し長文だが、先程の「自由」との
関連もあるので引用しておきたい。

自由人・いくさ人

先月の夏期大学の時、讃岐先生
と雑談をする機会を得て、その時
「ボランティアとは何ですか」と
質問したら、先生曰く「ボランティ
アは権利ですよ」と話された。ちょ
うど玉腰君も居て、先生が「君は
わかるだろ」と言い、彼もうなず
いた。勤めていた会社を辞めて、
一年間ボランティアとして、えひ
めの小さな島で自分の知らない自
己を発見し、主体的に生きること
に挑戦していることは彼にとって
権利なのである。

ボランティアという近頃では
無報酬という言葉に擦り替えられ
美名のもとに義務感をもって行動
する（あるいは行動させられる）
場合が割と多いような気がする。
あまり乗り気でないのに参加した
り、自分の都合を犠牲にしてまで
参加したりする場合もある。まわ
りの冷やかな目が気になり、強
制ボランティアになってしまうの
である。人には、それぞれ生き方・

考え方があるのに、画一的に押し
つけたり、意識せずとも集団心理
の作用でボランティアが行われる
としたら決して長続きしないであ
ろう。多数決はボランティアの敵
である。ボランティアは強制でな
く共生なのである。

自主的ということは権利の行使
であるのだから、参加して楽しく
充実感があり、そしてさわやかな
汗が流れ、ちょっとした自己満足
に酔うのである。そして「何の為
にやるのか目的がはっきりし、そ
ののための自分の役割は何なのか自
問し、自ら、「やろう」と思った
時、自由を味わった瞬間であり、
「自由人・いくさ人」になるのだ」
と五十崎の戦士は語る。ボランティ
アは、自由追求の権利だとわかつ
た。そして、場作りを計画するリー
ダーは、参加した人々が自由追求
の場として活躍できる舞台をでき
るだけ設定する気持ちが必要であ
ろう。

（原文のまま）

私の周囲には素晴らしい人物が
多くいる。今回はほんの三名だけ
紹介させてもらったが、機会があ
ればどんどん書かせてもらいたい
ものである。

ハードとソフト、ソフトはまさ
に「人」のことだろう。人にこだ
わって、人にこだわってこれから
もやってゆきたい。

夏祭りの歴史をたどろう...

内海村

浪口 靖宏

全国でも数少ない、真珠天然稚貝の産地内海湾では、今日も真珠の仕事で船外機のエンジンが音を立てて、キッチンと整理されたフロートに囲まれた海を行き来しています。地場産業の真珠稚母貝養殖業のおかげで、都会からのＵターンが多く、若者の増えているのが内海村の現状です。

今、村内の若者が組織している団体としては、青年団（二十六名）漁業青年同志会（五十八名）、商工会青年部（二十八名）の三団体があります。この若者達の力を合わせたイベントが、毎年八月十日に須ノ川公園で開催される「うちうみ夏祭り」です。最初は商工会青年部が、昭和五十八年八月六日に、同公園で行った「納涼カラオケ大会」がきっかけとなり、翌年には村内各地域からの寄付を募ることにより、村内ではじめて花火

を打ち上げることができました。

当時わずか二十人足らずのスタッフで、企画から運営・警備まで全て行い、すばらしい花火が上がった瞬間にはそれまでの疲れもふっ飛び、全員で喜び合いました。

しかし、商工会青年部だけの運営には限度があり、毎年増加する観客への対応が大変困難を極める様になってきたので、昭和六十三年に、内海村へ夏祭りの協力を要請すると同時に、漁業青年同志会・青年団・役場職員の若者に協力を依頼することにしたわけです。

以前から、我々青年部の活動に理解を示してくれていた仲間が何人かいて、手伝ってくれてはいましたが、今後の夏祭りのあり方を考えると、先の若者達の協力なくしては、開催できない状態になるのではないかと考え、三年がかりで代表者に理解を求める努力を

してきました。昨年は約六千人もの人出があり、本村二千七百人の二倍強の人々が須ノ川公園に集まりました。また、イベントの内容についても、内海村は海との関わりを無くしては、生活できない土地環境にあるため、海のイベント「地引き網」を昭和六十三年より開始し、イベントの目玉にしました。村内の子供達も、地引き網は初めてだったので大変興味を示し、毎年楽しみにしているイベントの一つとなりました。このメイン・イベントの企画及び運営は、漁業青年同志会が全て仕切ってくれて、子供達のために頑張っています。彼等も、初めは見る立場だったのが、何とかする立場の大変さ・楽しさが、この二年間でわかってきたものと思います。また青年団は、子ども相撲大会や、警備・交通整理等の裏方も進んで行い、ボランティア精神を発揮してくれています。今年度は、村内の若者にイベントについてのアイデアを求めるアンケートを行い、只今集計中です。

今、内海村は、地場産業の安定により、経済的には大変豊かになってきています。しかし、その為全てにおいて、経済優先の考えが目につくようになってきました。ここでもう一度、内海村の将来を見つめ直して、我々の海を大切に、その気持ちを子供達に行動で示し、伝えていくことを忘れないよう、村内の若手後継者が努力してゆく必要があると思います。ようやく「うちうみ夏祭り」を通じて、互いに意志の疎通が出来るようになってきましたが、もう一歩進んで村の活性化を更に図る為には、我々若者は何をすべきか具体的なアクションを起こしていく時だと考えます。そのパイプ役として商工会青年部は、先を見つめながら「歩」を進めていくつもりです。

現在、来る八月十日の夏祭りの準備に追われつつ放しの毎日ですが、皆さん是非一度「真珠貝のふる里内海」へお越し下さい。真珠作業で真黒に日焼けした若者達が、皆さんをお待ちしています。

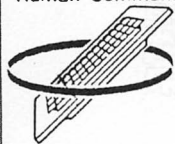
Town タウン

パソコン通信ネットワーク

広げましょう
ヒューマン
ネットワーク

Vol. 12

Human Communication & Network



ECCC
Ehime
Computer
Communication
Club

えひめコンピューターコミュニケーションクラブ

— LOGO —

今回は、知ったかぶりの出来るパソコン通信用語集です。

これは専門用語集というよりもパソコン通信の方言のようなものです。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

<オンライン>

NETとつながっている状態、又は、ボードのうえでのコミュニケーションを指します。

<オフライン>

NETとつながっていない状態、ボード以外でのコミュニケーションを指します。

<ボード>

メッセージや情報の集まる所。TOWNタウンだったら、喫茶TOWNや生活情報データベース等の事です。

<書きコミュニケーション>

ボードのうえで、話が進む事。「書き込む」と「コミュニケーション」の合体

<パソコン通信>

ワープロを使ってもなぜかこういいます。

<MSG>

メッセージ、書き込んだ（アップロードした）文章の事

<アップ>

アップロードの略ですが、オンラインで書き込んだメッセージも含めています。

<PRG>

プログラムの略

<RES>

レスポンス、レスと使う時もあり、以前のMSGへ関連するお返事の意味。コメントともいいます。

尚、文の引用には、行頭に >をつけて引用であることをはっきりさせるのが、望ましい姿です。

<PS>

追伸とか追加。英語の略語の場合本来付加すべき「.」が省略されているようです。

もちろんちゃんと使う方がよいのですが……

<公開メール>

本来、メールBOXが一杯で相手に送付できないときに、緊急に用いますが、配達証明付内容証明郵便のような使われ方もあるようです。

<みかか>

NTTのこと

おんな大閤記の「おかか」からきたパソコン通信の相方の意味。

カナキーをロックして、NTTと打ってみてください。

<ラブレター>

NTTのTEL代金請求書

<意味不明>

書くに書けないことや、内輪ネタになってしまったときに付けます。

<ウイルス>

メッセージを画面表示するやや無害なものから、FileやDiskを破壊する危険なもの等、現象や行為を行う有害なPRG。

<ワクチン>

ウィルスの予防や治療に役立つPRGの事。

◆ 4ヶ月後に続く……

。 。 あなたのコーナー 。 。 。

地域活性化と国際化の為の提案



四国ユース・ホステル共和国連合

自夢総長 平野 博昭

先ず、提案の前に、ユース・ホステルについて簡単に説明致します。旅をしたいという願いは、老若男女の誰もが抱く夢の一つです。その旅を、安全に楽しく、しかも経済的に有意義なものとなるよう考えられたシステムが、ユース・ホステル (Youth Hostel) を以下 YH と略します。運動なのです。この運動は、今から約八〇年前、ドイツの小学校教師リヒアルト・シルマン氏が思いつき、西ドイツのアルテナ城内に、青少年用の宿泊施設をつくったのが始まりです。その後この運動は、ドイツからヨーロッパに急速に広がり、今では世界中に YH がつくられるようになりました。

日本では、一九五一年に日本 YH 協会が誕生し、一九五四年八月には国際 YH 連盟に加盟が認められ、世界に共通する会員証が発行できるようになりました。今では、世界中に約五、五〇〇の YH、日本には約四五〇の YH があり、会員はその全ての YH 宿舎を利用することが出来ます。

YH の良さは、同宿の全ての人が、人種・宗教・性別・イデオロギーの差を越えて、友情を深める機会が持てること、お互いの迷惑にならぬよう決められたルールを、自主的に守ることによって楽しく泊まれること、ペアレントという親代わり管理者がいて、親切に面倒を見てくれるので、一人でも安心なことなど、YH は、他の宿泊



施設にない特色があります。

さて、今や世は「地域の活性化」「村興し」「町興し」「イベント」「国際化」などのはやりやまい(?) が全国津浦に蔓延し、同質同類の行事が毎年洪水のごとく企画立案され、実施されていることはご案内の通りであります。これら「症候群」の広がりは、過疎化の流れにはもはや抗うしようがないことの証明なのでしょう。各地区の担当されている人々のご苦労を思うとき、又、切羽詰まった姿を見るにつけ、心を痛めている一人であります。

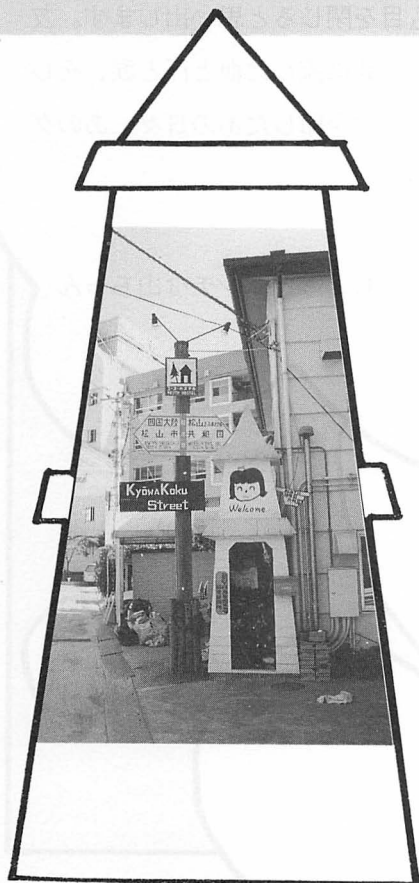
そこで、ここに一つの提案をしたいと思えます。前述しましたユース・ホステルで地域の活性化と国際化に取り組んでは如何でしょうか。といいますのは、YH を利用する人々は、殆どが都市部の若者たちと外国の青年なのです。

活性化の目安を、その地域の人々の「出入り量」とするならば、ユース・ホステルの様な施設があれば、そこにその可能性を求めることが出来るのです。



ここに、高知県の大豊町豊永にある、定福寺ユース・ホテルの事例を紹介して説明に変えたいと思います。ご他聞にもれずこの地域も過疎化の波をかぶっています。そして、定福寺YHにおいても、年々ホテルの利用が落ちていました。この地域にこれといった観光資源がないこともこの原因の一つでした。そこで、五大修行のコースを設定して、旅人に紹介し始めたのです。修行のコースですからかなり厳しいルートもあります。一番きついのは、全行程九〇km、一、〇〇〇mの峠越えのあるサイクリングコースです。今時の若者に受け入れられるものだろうかの心配をよそに、この企画は大成功となりました。今、この修行をするために、定福寺YHには、この豊永地区には、春休み夏休みには若者が溢れています。

定住を増やすという活性化の方法もありましょうが、この様に、この地を第二の故郷のように思わせ、毎年訪れさせる方法もあるのです。



又、この定福寺YHには、年間で二〇〇人の外国の青年が訪れます。青年ですから、将来その国の閣僚になったり、ひょっとして大統領になる人物もいるかもしれません。彼らは、豊永の素朴な山村の生活に触れたり、お寺での祈りを体験したりして、三々七日は、滞在しています。もちろんその間に地域との交流もあります。大豊町も外国人交流会館をYHの近くにつくりこれに対応しています。

払って滞在する訳ですから、我々のやることは、YH施設をつくり、黒字すれすれに営業を維持すればいいのです。

如何でしょうか。種々なノウハウは、YH協会と協議しながら身に付けていきます。具体的な一つの提案ですが、前向きに考えてみる価値ある一つの方法であると思います。

まさに“うだる”真夏日の或る日曜日、孫達（小3・5）にせがまれ、北条市鹿島を訪れた。足裏をくすぐるような砂や、泳具とはしゃぎ廻る孫達の姿につられ“クロール”に“平泳ぎ”にと気ははやっても僅か数分の“あがき”でグロッキー。だが鯛飯と一杯のビールは、気だるい快感の中で夏を味わせてくれた。

智ちゃん

まちせん
ちゅーく

思い出

甲子園では、今年も数々のドラマが生まれました。私も目を閉じると思い出します。友と白球を追い、共に流した血と汗と涙、そして青春の一ページを印したあの日々、あのグラウンドを……

ちょっとセンチな山ちゃん

星降る満天の空……寄り添うふたり、寄せ
ては返す波の音『ほら、星が僕たちを見てい
るよ！ 星にも勝る君の美しさは罪だ！』こ
んな事が平気で言える……夏の思い出。

ちょっとエッチなゲンちゃん

最近、蝶やトンボやホタルを利用した地域おこしがブームですが“セミの島”ってご存じですか？そこは、低木でもいろんなセミが、びっしりと止っているんです。残念ながら、それは30年前に私が訪れた真夏の西日光のワンスナップなんです……。

ミッキー

個人的に出席した三重県鳥羽市での「サンベルト・リゾートフォーラム」で、ついに中谷健太郎氏にお会いすることができた。中谷氏曰く「まちづくりセンターに来た人は、由布院に来るようになっていきます」とのこと。由布院をまだ訪れたこともない私にとって、次の目標は自ずとできた。素敵な思い出と目標のできた貴重な7月21日に感謝、感謝。
ルパン

夏の

学生時代、友達とバイト中の事。休みの日、千葉の海へ酔っぱらい遊泳。気がつくと、岸が見えない。波を被り潮を飲み死の恐怖と闘い、足がついて2時間記憶喪失。翌朝刊、その浜一帯で非常高波による6名の水死者の記事。こわかった!!

うっちゃん

どうも ありがとう。



次回からは「舞たうん」の編集Ms.
が変わります。みなさん2年間どうもあ
りがとうございました。

これからも「舞たうん」と仲よしでい
てくれるとうれしいです。

丹下 真澄

人が人らしく生きる為に、自然
は自然そのものであった方がいい
と思う。
人が快適に過ごす為に、自然は
形を変えられてゆく。
創られた自然でも、自然は力強
く、いつも驚かされてばかりいる。
今年も自分の出番を忘れずに楽
しませてくれる。「ありがとう」
と心から拍手をおくります。



久保田ひとみです。
お世話になりました。



自分を喜ばせてくれる言葉を
言ってくれる人は、まわりにた
くさんいるけれど、それは自分
にとって何の成長にもならない。
自分にきびしい言葉を言っ
たり、落ち込むような言葉を言っ
てくれる人は少ないけど、それ
は自分のために言ってくれたの
だと、私は、そういう人に感
謝し、心から愛せるようになり
たいです。
またどこかでお会いしましょ
う。

バイ

バイ



山ちゃんの ひとりごと

お盆を過ぎると、やがて食欲の秋がやってきます。

(私の場合、食欲に季節は全く関係ないのですが……)

考えてみると、秋を語る言葉はた

くさんありますね。食欲は勿論のこと、

スポーツ・勉強・読書……etc.

なるほど、秋は四季の中で、何をするにも一番適しているみたいですね。

つい先日ある企画で、全国のサラリーマンを対象に、全国主要都市の居住性ナンバーを決めるアンケート調査が行われました。

その結果、なんと、松山市は全国一位という結果となったのです。

その理由の一つとして「四季がハッキリしていて住み易い。」という事が挙げられています。

ソー言われてみれば、フムフム確かに住み易い。生活上、何の不便がある訳でもないし、個人的には、色々遊べる場所はたくさんあるし、そして……オーッとイケない！私は修業

中の身、しっかり勉強しなくては、(ふる里の皆さん頑張りマス)

ところで皆さん、本当のやすらぎって何処にあると思いますか？(や々と本題)

今号の特集では、それぞれの地域で、それぞれの五感を通じて、その事にこだわりを持ち、やすらぎを提供しながら頑張っている人達にスポットを当ててみました。いかがだったでしょうか？ご意見等お聞かせ願えたら幸いです。

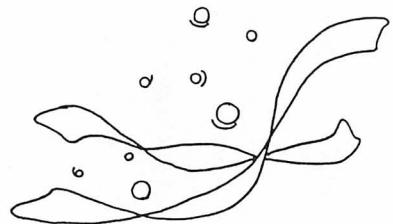
最後になりましたが、今回他コーナー含め、原稿執筆等ご協力頂いた皆さん、どうもありがとうございました。感謝！

まだ生ビールの美味しい季節はしばらく続きますが、皆さん体調を崩さない様に、そして夏バテしない様に、仕事に〇〇〇に頑張ってください。それでは……

編集後記

でした。

地域づくり研究会議運営委員の
鎌田宏史さんが、去る七月十四日
交通事故で亡くなられました。
城辺町の夏のイベントとして、
今ではすっかり定着した「ジャズ
in 南レク」の実行員長として
活躍のほか、足もとを見つめた地
域づくりの実践リーダーでした。
元気のいい大きな声ときらきら
した瞳でいっしょけんめいしゃ
べる顔が忘れられません。
ご冥福をお祈り申し上げます。



ある無名戦士の死

渡 邊 浩 二

(友と供に奉らん)

人は悲しい。人は淋しい。

訃報！それはあまりにも生者を圧する。

形よりも心だと言いきれる人の少なくなったこの現代で、期待や友情そして人徳をよそにあなたは逝ってしまった。

人々のにぎわい、しあわせをあれほど夢見ながら、創りながら、他人の道具へと身を呈しながら、自らの美意識の実現を自らのこだわりの中で、あなたほどさりげなくテレ笑いしながら、グチの一つも言わず町を変えようと男のロマンに燃えながら、人を恨みもせず、一人作業した南予の指導者が、若きソクラテスが、君は突然死んでしまわれた。

偶然のいたずらの運命の天の、あなたの絶対の消滅!!

これは大きすぎる悲しみだ。

どう叫んでもとどかぬ哀惜の念である。アンピリーバブル!!

あなたがなくなったことは惜しすぎる。人生はひどすぎる!!

なんで君死にたまうや!!

あなたと一緒にやりたい仕事がいっぱいあった！

途方の涙に我等はくれる くれる くれる……

失語と絶望と悲しみに力を失した……

今はレクイエムを捧げるのみである。

貴兄の魂の安らかなる眠りと遺族への加護を貴兄と共に永遠に祈るのみである。……合掌
生マレタ

泣イタ 笑ッタ

友デキタ

妻子ヨ安ラカナレ

戦ッテ 死ンダ



1990. 7. 14没 アース・ジョウヘン・カマタヒロシ

群青色の絵の具をこぼしたような空のもと、サンサンと輝く太陽にのぞかれながら、あなたへの手紙を書いていきます。

お元気ですか。

窓の外では、一瞬の風向きの変化にうろたえる風見鶏が、なかなかかわいいと思う…、そんな残暑きびしい初秋の昼下がりで。

内容についてのご意見や活動内容についての記事など気楽にお寄せ下さい。

〒七九〇 松山市道後一万一の二

（愛媛県県まちづくり

総合センター

TEL

〇八九九（二五）五五五七

FAX

〇八九九（二五）六六八〇